（別紙２）

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　林　三　博

本論文は、近代日本における〈メディア＝複製技術〉の作用を、その作用がもたらす変化に抗う社会的な動きとそこでの「言語化し得ないもの」の語られ方から捉え返すことにより、「日本／国体」についての言説秩序を成り立たせてきた条件を測定する試みである。〈近代〉を、事物の秩序から乖離して意味の秩序に基づく思考様式が可能になる実定性の水準として捉え、メディアの作用はこの意味的な秩序の自立を可能にする点にあると考える著者は、日本近代のメディアが必ずしもそのようには作用してこなかった幾重もの屈折を多様な歴史事象の読み解きから明らかにする。

序章で著者は、レヴィ＝ブリュールの「融即律」やレヴィ＝ストロースの「野生の思考」、ミッシェル・フーコーの『言葉と物』の議論に分け入り、フーコーの方法が、歴史性という非人称的な時間のなかで〈近代〉の外について記述の可能性が与えようとしている点に注目する。本論文の目論見は、レヴィ＝ブリュールならば「融即」という用語で言い表した、表象間の結合において矛盾の回避を強いないような社会的振舞いを、近現代日本の非人称的な時間のなかで捉えていくことにある。

著者は、近代日本に浮上してきた「国体」が、ベネディクト・アンダーソンのいう「想像の共同体としてのネーション」とは質的に異なるものであったと考える。後者の場合、社会的想像力が出版＝複製技術に媒介されていくことが決定的に重要であり、ネーションとはメディアを媒介に「想像される」国民的主体である。ところが「国体」を根拠づけたのは、記号的な恣意性ではなく、自己生成性としての唯一無二性である。近代ナショナリズムが「想像されたもの」の共同性に基づくのに対し、近代日本の「国体」は、「唯一無二な存在への／としての身体的な感応」の共同性（習俗の秩序）に内属し続けた。

他方で本論文は、習俗の秩序が「国体」として概念化されていったのには、近代国家としての日本の成立が前提となっていたと考える。とはいえ、アンダーソンにあってネーションと近代国家は一体だったのに対し、近代日本でそうした一体性は前提にできない。むしろ、〈習俗〉の秩序において分散的に生成していた身体感覚の多様な同一性が、近代国家としての日本との対応物に相応しいまとまりへと再編されていくプロセスが存在したのである。本論文は、これまでの大多数の日本論が、「日本」という存在論的範疇を実体視してきたことを批判し、むしろ著者のいう「痕跡的外部」からこの上記の再編過程を記述していく可能性に賭けている。一般に〈近代〉では、言葉／言説は意味が自律する秩序の形成に向かうが、〈習俗〉の秩序では、諸身体から場所、事物、自然まで、言葉によらぬ構成素によって言説が刻み込まれていく。これは、フリードリッヒ・キットラーが論じた19世紀以降の機械的書き込みのシステムとは異なるもので、むしろ〈近代〉人間学の誕生以前における非人称的な書き込みの諸様態である。

こうして第一章では、明治以前からの事物への愛着を継承しつつ、複製技術の導入に媒介されて「皇統の生成や事物の連鎖を身体の宛とする共同性」としての《日本》が反作用的に生起してくる過程がたどられる。その第一節では、江戸の博物学から明治の宝物記録への流れの中で、記録することが体系的、統合的な知の領域を形成せず、羅列的で分散的な知恵の集積にとどまったことが確認される。第二節では、万国博覧会出品において、カタログ印刷技術や写真製版の導入が事物やその記録の秩序を部分的に変容させ始めていたことが示される。第三節では、こうした西洋化の流れで導入された分類法

や写真製版、印刷技術に対し、むしろ逆の、縦覧の禁止によって新たな事物の秩序が形成されていく過程がたどられえる。第四節では、博覧会や印刷物において近代的外貌を与えられた事物が、同時に外からの視線に閉じられた《日本》を形成していく過程がたどられ、第五節では、そうした閉じられた《日本》の中心に位置づく天皇が、複製技術のいかなる配置に取り巻かれていたのかが検討される。

第二章では、昭和初期の知識人の思想言語に照準しつつ、活字メディアが習俗の秩序としての《日本》を思想として表現する過程での、複製技術と習俗の秩序との衝突を、大正期に登場した「日本精神」をめぐる言説に注目しつつ検討している。著者によれば、「日本精神」をめぐる言説は、活字メディアがかたちづくる言葉／意味の世界を、作者と読者が共同で打ち消していく傾向を含み、この思想の外貌を自己否定する文章の連なりにより日本精神論は非人称的な感覚の場に近接していく面を含んだ。

第三章では、昭和初期の視覚メディア、とりわけ写真が、自己否定的な仕方で「日本的なもの」を表象していく逆説が描かれる。対象を機械的に書き込む技術である写真は、非人称的な書き込みの場としての習俗に近接している。大正モダニズムの商業美術は、モダニズムの極致のようでありながら、その視覚的表現において習俗の秩序に近接していた。ところが昭和に入り、報道＝宣伝の技術として写真が利用されていくなかで、「日本的なもの」を視覚化すること自体が目的化され、視覚メディアと事物の秩序との親和性は否定されていく。日本精神論と同じように、報道＝宣伝の写真技術はまるで活字メディアのように対象の内容を規定し、事物の秩序を意味の一元的秩序に回収しようとした。しかし、実際にグラフ雑誌や写真展を分析するなかで著者が発見するのは、そうした意味の秩序がきわめて不安定な仕方でしか成立せず、むしろ図像の連鎖によって写真が事物的な秩序に再び近づいていく様態であった。

第四章では、戦時期の戦意高揚映画でこうした逆説が極限に達する姿が描かれる。戦意高揚映画において、兵士の言葉や表情は主題としてコード化され得ても、その外側に広がる戦場の光景は意味不明な残余となっていた。やがて戦時期のプロパガンダ映画が向かったのは、主題の表現をスクリーン全体に広げていくのではなく、逆にその残余が主題の表現を解体していく方向であった。著者は山本嘉次郎の映画『ハワイ・マレー沖海戦』を例に、映画が主人公の内面描写からは乖離し、海戦そのもの、国家の危機的状況に連動する身体と機械の動きをまるで記録として描いていくことを示している。

第五章では、「国体」との結びつきを失った戦後の《日本》が、変容する情報環境のなかでどのように表出されていくかが、大阪万博やテレビを事例に論じられる。《日本》の歴史的同一性は、もはや天皇によっては支えられなくなり、テレビの視聴覚的フローに引き継がれていくというのが著者に見解である。

以上の論述と本人による概要説明に対し、最終審査では、本論文が膨大な文献を渉猟した野心的な試みで、第二次審査で指摘された点への対応はなされているものの、議論が読者の批判に開かれておらず、モノローグ的に閉じている印象が強いことが難点として指摘された。すなわち、いくつかの論述が断定的になっており、反照可能性が十分には保証されていないことや、論述における著者自身の立ち位置が明示されていないことが複数の審査員から問われた。結果的に、理論的に非常に重要なテーマに向けた労作でありながら、「読みにくさ」が目立ち、本人の今後にとってもプラスでないとの指摘もあった。また、本論の重要な要素である「習俗の秩序」自体についての具体的記述が少ない点が、論文の説得力を弱いものにしているとの指摘もあった。しかし他方で、本研究の問題設定は独創性が高く、渉猟している先行研究や資料は実に広範囲にわたりつつ全体として一貫した議論を展開していることは高い評価を与えられるべきだとの認識も示された。以上のように、著者の論述の難解さやモノローグ的な傾向は、今後の研究者としての人生において改善してもらうことを課題として残しつつ、本論文の独創性、一貫性、スケールの大きさ、研究の将来性などの点から総合的に判断して、本審査委員会は、本論文が博士（学際情報学）の学位に相当するものと全員一致で判断した。